

平成29年度長野県上田高等学校 全日制 終始業式 校長講話

平成29年（2017年）9月29日

こんにちは。

早いもので、今年度も半分が過ぎ、残り半分となりました。今日は終始業式です。上田高校は、前期の終業式と後期の始業式を一度に行うという、何とも効率的なシステムを取っています。

今日はこの後、生徒会役員選挙があります。生徒会の中心が3年から2年へとバトンタッチされるわけですが、国政では衆議院選挙が近づいてきました。3年生の中には選挙権のある人が、単純に考えて半分くらいいるのでしょうか。受験準備の時期ですが、並行して、きちんと権利を行使できるような人になってください。2年生・1年生ももうすぐです。

さて、今日は1人の女性の話をします。

私はテレビ番組を週に何本か録画しています。リアルタイムで番組を観ることがほぼ不可能なので、観たい番組を予約しておいて時間のある時に観ているんですが、先週末、「カンブリア宮殿」というテレビ東京の番組を観ていたら、「マザーハウス」という会社の社長をしている山口絵理子さんという30代の女性が出演していました。有名な方なのですが、私はその時まで知りませんでした。「マザーハウス」というのは、「途上国から世界に誇れるブランドを」をテーマに、デザインはすべて山口さんが行い、アジアの最貧国と言われるバングラディッシュの、ジュートという地球にやさしい繊維や軽くて軟らかい革などの現地の材料と、現地の人たちの技術を使って、現地の工場で作った製品を販売する店舗を経営している会社です。現在では、東京、京都、大阪といった首都圏や関西圏を中心に、台湾や香港も含め、何店も出店していて、結構人気があるんだそうです。

社長の山口さんは、小学校時代にいじめにあい不登校になります。中学校時代はその反動で髪を染め授業をさぼり、毎日遊び歩いていたそうです。そんなある日、偶然柔道の練習を見て、自分も強くなりたいと思ったのと女の子が男の子を投げ飛ばす姿にあこがれて、柔道強豪校である大宮工業高校に入学、初の女性部員として毎日泣きながら男子と同じ練習をしたそうですが、その甲斐あってか、全国で7位になります。高校入学の目的が柔道だったので、3年最後の大会が終わると、目標がなくなり、これからどうしようかと考えます。そして、それまで一度も真剣に勉強してこなかったことに気づき、大学に行こうと決め、猛勉強に取り組みます。小学校、中学校、高校とほとんど基礎がないわけですからこれは大変です。しかし、結局、慶応義塾大学に合格し、入学します。一般入試での合格は開校以来初めてのことだったそうです。大学時代には海外に興味を持ち、アメリカの国際機関にインターン採用されます。貧困問題に興味があったので「アジア最貧国」とネットで検索すると「バングラディッシュ」と出てきて、じゃあそこに行こうということで、実際に一人で行くんですね。

そして外国の援助が少しも国民に届いていない状況を知り、その日のうちにバングラディッシュの大学院に入学しようと決めます。一旦日本に戻り、大学を卒業した後、2年間バングラディッシュで過ごしたそうです。日本のアルバイトで貯めたお金で、バングラディッシュのために、現地の商品を買って日本で売ろうと考え、現地の工場に発注しますが、前金を持ち逃げされたり、不良品の山が届いたり、失敗が続き、日本に帰ろうかと考えます。しかし、待てよ、本当に自分はできることを全部やったのだろうかと思い直し、24歳の時、さっき言った「マザーハウス」を立ち上げます。「マザーハウス」という名前は、尊敬するマザーテレサの「マザー」と、アパートの窓からたくさんの路上生活者が見え、この人たちにとって「家」のような会社でありたいと考えたからだそうです。

それから11年、現在、「マザーハウス」では、バングラディッシュのジュート製品、革製品に加えて、ネパールのまゆ農家から仕入れた絹を使って現地で作ったストールや、インドネシアやスリランカで作られたジュエリーなども扱い始めているそうです。

と、こういう話をすると、自分にはまねできないとか、関係ないとか、自分とは住む世界が違うという人がいますが、本当にそうでしょうか。

小学校で学校に行かなくなった山口さんが、そのままずっと引きこもっていたらどうなっていたのだろうか。中学校では非行に走ったわけだけでも、それをそのまま続けていたらどうなっていたのだろうか。高校では柔道という目標を見つけたが、その目標がなくなった時にポーと毎日を過ごしていたらどうなっていたのだろうか。バングラディッシュで失敗が続いた時に、日本に帰ってしまっていたらどうなっていたのだろうか。

一見順風満帆に見える人たちも、実はみんな失敗や苦悩やうまくいかないことの連続だと思えます。成功している、あるいはそう見える人たちは、そういう苦しい時に、どう自分をコントロールするか、どういう発想で切り抜けるか、といったことを様々な経験の中で学んだ人たちであって、失敗しなかった人たち、うまくいかなかった経験を持たない人たち、ではないと思えます。山口さんは、小学校では学校に行けず、中学校では学校をさぼって遊んでいた。高校で柔道に出会い、人生が変わった。しかし彼女の人生は自然に変わったのだろうか。よく見ると、実は、そうなるように山口さんが自分で自分を変えているんじゃないか。マイナスの方向に行ってしまう自分を、途中で、プラスになるように変えたんじゃないか。そう思います。これはあくまで山口さんという人の人生における歩みであり、山口さんの例です。他人と比べる必要はなく、みんなそれぞれペースも中身も違っているだろうし、実際に違っていいんだと思えますが、山口さんから学べる重要なことは、常に「本当はどうか?」「自分は何がしたいのか?」「どうありたいのか?」と、自分自身の心に問うこと、自分自身ときちんと対話することをしていくことです。自分の言動を見つめるもう一つの眼を持つこと、それをメタ認知と呼んでいますが、そういうことをしています。そしてもう一つ、必ず実際に行動に移しています。君たちにも、心の奥底にある、自分自身の本当の気持ちや想いを自分でいつも確かめ、それを一番大事にして行動してほしいと思っています。

4月の始業式で、君たちの現代文の教科書にも載っている、丸山真男さんの『『であること』と『する』こと』の話をしました。上田高校という学校が持っている伝統と歴史の上に胡坐

をかいていると、上田高校生ということの意味が変わり、上田高校の意味が変わってしまう。だから本当の意味で君たちが上田高校生「である」ためには、毎日、一瞬一瞬、上田高校生を「する」ことが大事だ。上田高校生を「する」とはどういうことなのか、それは一人一人が自分の頭で考えて実践してほしい。そう話したつもりです。

多くの生徒諸君が、様々な分野・場面で上田高校生を「して」いると感じています。そうすることで自分たちの高校生活も充実したものになるし、自信にもなるし、君たちに続く後輩たちが上田高校に行きたい、上田高校生になりたい、と思えることにも繋がると思います。しかし、一方で、4月以降、例えば、各ホームルームで注意を受けたことがあったと思うけれども、外部から苦情や批判が学校に来ることがなかったわけではありません。苦情が来たり批判されたりする行動が、今言った、自分自身の心に真剣に向き合った上での結論だというのなら、それを尊重する場合もあるでしょう。しかし、往々にして、そういった行動というのは、集団心理に基づいてノリでやってしまっていたり、逆に何も考えずにやってしまっていたりということがほとんどだと思います。上田高校は、自由な校風を保ち、生徒の自主性を重んじ、規則をできるだけ行使しないようにしています。それは、上田高校生である君たちに期待しているからであり、入学当初はいろいろあったとしてもその後の君たちの成長の可能性に期待しているからです。しかし、自由と好き勝手を混同したり、自主性とわがままを混同したりするような、その期待に値しない生徒が混じっていると、個人個人では様々な生徒がいたとしても、全体としては、この集団は管理しないとだめだということになってしまいます。私はそんな学校になってほしくないと思っています。だから、「上田高校生」と言った時には、ここにいるすべての生徒が、例外なく、自分も当事者なのだ、という自覚を強く持ってほしいと思っているのです。そして、さっき言ったように、自分の心に「本当はどうなんだ?」「これでいいのか?」と問う、自分との対話を常にしてほしいし、自分を見つめるもう一つの眼を大事にしてほしい、そうやって自分の人生を着実に歩んでほしいと願っています。

大いに期待しています。

今年度の後半戦、頑張りましょう。

終わります。